哲學研究
第四百七十二號　第四十一卷　第二冊

人生の目的

チャールズ・ハーツホーン
三小田敏雄譯

人生の目的ないしは、われわれの求める「善きもの」とは何であろうか。それは調和のある、幸福な、満ち足りた體驗を得ることなのであろうか。この世界の美を樂しみ、また他人がそれを樂しむのを助けるようにすることであろうか。愛と理解を身につけ、また他の人々にも得させるようにそれらを喚びさましてやることなのであろうか。これはしばしば「ヒューマニスティック」な見解と呼ばれるものである。以上述べた限りでは、われわれの誰しもがそういつた見解を受け容れると思う。しかし、それだけで果して十分なのだろうか。それは人生の究極的總括的目的をわれわれに與えるであろうか。

恐らくは、人生の目的は、死後のより良き生のための準備をなすものであると考えられないであろうか——それがこの地上で再び他の人間或いは動物のからだに生まれかわるにせよ、或いは樂園とか、天國とか、涅槃（ニルヴァーナ）の境地に生まれかわるにもせよ——。これは通俗的宗教に共通した見解であつた。キリスト教と回教にもこの見解の或形式が見られ、またヒンズー教と佛教諸宗派にはそれの數多くの形式が見られる。この通俗宗教的見解はヒューマニズムと矛

盾するものではない。というのは、われわれはこの人生にあつて倫理的に生き、相互に愛し合うことによつて、死後のより良き生に値いすることが出來るとされるからである。しかしながらそこでもなお、一般に考えられているように、この見解はこの生を、無限に重要な一つの目的、すなわち、もしそれが達せられうるとするならば、死後に於けるわれわれの永遠の幸福（everlasting happiness）に到る、一手段としているのである。しかしこの目的に到達する可能性は、何ら明らかな證據に基づくものではない。少くともわれわれの多くの者にとつては、死後に天國や地獄によみがえることも、他のからだに轉生することも、既知の事實によつて支持されてはいないと考えられているのである。またこの見解は、他者に對する寛仁が實は利己（self-interest）にほかならないことをあらわしているように思われる。というのは、寛仁が永遠の幸福に達し永遠の苦しみを避けるための手段となつているからである。かくては、生の意味はむしろあいまいになつてしまう。つまり、われわれが愛の動機より生きるべきであるといつても、そうすることによつて、結局われわれは單に、自分自身の利益に仕えることになるからである。また將來の生との比較においては、なにごとも重要でなくなるのであるが、しかも恐らく將來の生など無いかも知れないのである。

もう一つ困難な問題がある。それは、個々人の生の果てしなき繼續は、たといそれが樂園に於てゞあつても、果して望ましいものだろうかという問題である。人間というものは、經驗の無限の繼起に値いするもの、或いは耐え得るものなのであろうか。それは無限の章節を持つ本の如きもの、或いはどこまで行つても最終行のない詩の如きもの、或いは無數の變奏を伴なう主旋律の如きものとなるのではなかろうか。しかし同じ主旋律の變奏曲は暫らくとすると、きつとつまらなく退屈なものになつてしまうだろう。私にしても、私の知つている他の人たちにしても、無數の表現に堪え得る程の個人的な話題をもつているとは信ぜられない。要するに、新奇さを求めるところに「生きることの妙味」（zest of living）がある。幼年、青年の時代には、事物は新鮮で刺激的である。五十年たち百年たてば新奇さの多くは消え去る。かくては、五萬年の後にはどうなるであろうか。

この新奇さの問題の解決は「死」である。私は二・三の例外を除いて、なぜ哲學者がこの事を語らなかつたのか判らない。われわれは死んで新しい世代に道を譲る。新しい世代の一人一人は、新しい人格をもち新しい主旋律をもつて出發する。しかしそれは無限の變奏曲によつてでなく、それ相應の數の變奏曲によつて推し進められる。もし死が、地上や天國における新しい生への再生を意味するとすれば、同じ問題が起り新たな死が要請されることになるであろう。轉生說（transmigration theories）は、このことを認めており、その點において通俗的キリスト教の見解に立ち優るが、その利點に對する代償も當然支拂つているわけである。というのは、私自身がかつて生存した、或いは將來生存するであろう動物や人間と同一であると考えたところで何の役に立つだろう。このような過去或いは未來に擴げられた自己同一（self-identity）は、單に言葉の上だけのことにすぎないように思われる。私はこの見解に意義を見出そうと努めたが、それがいかなる問題をも解決するのを見ることは出來なかつた。それに、この見解は明らかに大變容易ならぬ問題を生み出している。私は、死という新奇さ――しかもこれは新奇さの手段として個人がほんとうに死に、新しい個人が生みだされるということになるのだが――、にとつて代りうるような新奇さは存在しないということを信ずる。

しかしながらそこには、通俗的宗教の諸見解が解決しようと試みている正しい問題があり、誠實な問いがあると私は思う。そしてその問いに對して、それらは一つの答えを與えている。この答えは、私の考えでは立派な答えであるとはいえないが、そこで問われている問いは、他の諸見解、例えばヒューマニズムのごときが全く對決していない問いなのである。

ヒューマニズムの見解が答えを與える唯一の問いは次の如きものである。それは、人間において從つて限られた意味での生の價値は何であるか、或いは人間の幸福とは何であるか、また何處にあるか、という問いである。この問いに對してヒューマニズムは、完全ではないが正しい答えであり、そして通俗的宗教は甚しい程度において部分的に誤

つた答えであると私は考える。しかしそれとは違つたもつと別の疑問がある。それは、全體としての宇宙の中で全未來を貫ぬいて、生の全體的價値(total value)は何であるか、という疑問である。また廣大無邊の空間・時間の中で、この小さな惑星上にほんの束の間だけ生起するものが何故重大なのかという疑問である。假りにわれわれが今幸福であり、また他人を幸福にしているとしよう。だが、すべてが過ぎ去りわれわれが皆死んでしまつた後に、われわれが幸福であり幸福にしたということが、どうして良いことなのであろうか。われわれの努力を通じて、われわれの子孫が手に入れるであろうところのものが、唯一の永續的な業績であるというのであろうか。たしかにわれわれは、子孫のためにというだけでは生きることが出來ない。生は少くとも部分的には、生きることのために、過ぎ去りゆくこの瞬間の價値のために、生きらるべきである。しかし諸君の瞬間或いは私の瞬間の殆んどが、後世にとつては何ものをも意味しないであらう。またわれわれがこの世を去つた時、これらの瞬間はわれわれにとつても何の意味も持たないであろう。そうだとすると、われわれが生きたとか立派に生きたとかいうことの意義は一體何であろうか。後世の人類も結局は、終局に達するであろうし、或いは變遷を遂げて、遂にはわれわれが爲したと考えられうる如何なる貢献も認知されえず、疑わしいものになるに違いない。またきつとそれは、われわれの生が實際に生きられたことの理由づけを與える尺度ではないに違いない。私の見解では、純粹なヒューマニズム（しばしば自然主義と呼ばれる）はこの問題の解決ではない。

因襲的なキリスト教も、回教も、また若干の通俗的佛教も、その救濟論によつて次の問いに或る種の答えを與えている。それは、いかにして地上におけるわれわれの生は、永續的効果(an enduring result)を獲得するかという問いである。この永續的効果は、（もしわれわれが幸いにもそれを獲得できるなら）われわれ自身の永遠の幸福たり得るはずのものである。

さらにもう一つの考慮すべき問題がある。今日多くの天文學者は、生物の住み得る惑星が何億とあり、恐らくその

うちの何千或いは何萬かの惑星には理性的動物がいると信じている。われわれ自身の惑星の上にさえ、百萬も、それ以上もの動物の種類があり、また何十億もの人間がいる。これらすべてのものを「寄せ集める」と、どういう値打をもつことになるのか――もし何らかの値打があるとするならば――。一人の人が、一人より多人數の方がより價値があると感じて――、グループの爲に生命を犠牲にすることはあり得る。しかしこの「より價値がある」ということは、なにに對してなのであるか、或いは誰に對してなのであるか。二つの林檎は、もし諸君が二つとも食べようと欲するならば或いは二つとも賣つて一つ賣るより多くの金を得ることが出來るならば、一つよりも良い。しかし、人間を加算する毎に、餘分の利益を手に入れるものがいるだろうか。私は私の幸福を、諸君は諸君の幸福を手に入れる。しかし誰が、諸君の幸福と私の幸福の合計を手に入れるだろうか。諸君は別々の個人の幸福を加算し得るか――そしてそれらを一つのバスケットに入れ、そこに幸福がどれだけあるかを見ることが出來るか。ヒューマニストの見解によると、最大多數の最大幸福は結局一つの幸福でさえなく、たゞそれについて考えをめぐらす哲學者の頭の中における合計に過ぎない。

われわれはこゝで、二つの尖端をもつ問いに當面する。それは、どうして時間の中にある生は、寄せ集められると永遠に對して何か値打ちのあるものになるのか、という問いであり、またどうして生は、こゝには私の生があり、かしこにはあなたの生があり、他の惑星には別の生があるというふうに空間の中にひろがりをもち、そしてそれらが加算され合計されるとき、少くとも合計される各項目の價値を保つことになるのであるか、という問いである。

三千年或いはそれ以上の間、人はこの問いの兩側面に對して、或る答えがなされるのをかい間見てきた。この答えははなはだ單純である。もし、空間と時間の中にある生の全體的統一というものがあり、すべてのもろもろの生が、永續的な、眞に「不滅の」存在であるところのすべてを包容する自覺的な生の内部にある一項目であるならば、ただそういうものでありさえするならば、われわれのすべての瞬間は唯一の價値に對して、その時こそ些かなりとも貢献

し得るのである。何故なら、たしかに永續的意識（everlasting consciousness）は、一度び所有したものを決して忘れない意識でもあるだろうからである。完全な持續（endurance）と完全な記憶（retention in memory）は、論理的にいつて相伴うものである。

下等動物は、單に感情（feeling）を通して自らを宇宙的背景と結びつけ得るが、人間は、もしその人間的能力を充分に發揮すべきであるとするならば、色んな事柄について、またほかならぬこの事についてさえも、思考すべきである。純粋なヒューマニズムの難點はまさに、それがわれわれに人間的であることを全く許さず、或る點では動物的水準にひきおろすことである。つまり他の動物は、天的な或いは神的な事柄について迷信（superstition）を持たない、ほかならぬわれわれ人間も、ある事柄について思考するのを止めて、動物と同じやり方でかゝる迷信を避けることが出來るであろうというのである。

しかし恐らくわれわれは、できることなら、それより高いところを目指し、また眞理を見出すことによつて迷信を避けるというもう一つの道を探求すべきであろう。しかもそれは、われわれがそれによつてほんとうに生きることの出來るような眞理でなければならない。

今述べてきた見解を受容れるにさいして生ずる最大の困難を次に取扱いたいと思う。それは、この世界にこんなにも多くの闘争や苦難や邪惡があるのに、どうしてわれわれは、すべての生が一つの最高の永續的な生の内部に包括（include）されていると信ずることが出來るのか、ということである。もし、この最高の生、神的生がすべてを包んでいるとするならば、惡は如何にして可能となるのか。この神的存在は、自らの構成要素（constituents）を規制することが出來ないのか。それは力に缺けているのか。

私は答える、――それは自らの構成要素を完全に規制し得ない、がしかし、そのことは決して力に缺けていることにはならない――、と。

しかし諸君はいうかも知れない、――或る存在が、自らの構成要素を十分に規制出來ず、しかも力に缺けているのではないというのは、實に奇妙な逆説（パラドックス）である――、と。

それに私は次のように答えなければならない、――それにもかかわらず、それこそ私の云わんと欲することなのだ――、と。

この逆説を取り除こうと試みてみよう。

もしAが、B・C・Dを十分規制し得ないならば、それは次の二つの理由のいずれかのためである。すなわち、Aが弱くて、最上最高の力を所有していないためであるか、もしくは、もう一つのありうべき理由は、B・C・Dは、たといいかに秀れた力によってであっても、十分に規制され得ないような性質をもつたものである、ということのためである。こゝで次のように論ずることは可能である。曰く、――純粋な個性的存在は、少くとも部分的には、自己決定的な存在として、ないしは自由な存在としてのみ凡そ實存し得る、また彼らがそこから生じ、その中で活動している境遇によって形づくられ規制されうることが大きいのであるが、しかも凡そ個性的存在として實存するためには、彼らは何らかの仕方で、したがってまた或る程度個性的に行爲せねばならない、と。

これが、私の新物理學における「不確定性原理」とその關係諸概念に熱中している理由である。個々の存在の諸行爲を嚴密に決定しようとした古い古典的法則を、平均的行動（average behavior）という統計學的法則に置きかえることは、若干の哲學者が早くから豫測していた、個性と自己活動性（self-activity）とは不可分であるとの眞理の顯現にほかならないと、私は信ずる。

もし、この原理が妥當ならば、――私はそうだと全く確信しているのだが――、神的生にとって自らの構成要素の上に嚴格な規制を行なうことは、構成要素を持たないのと同じことになるであろう。また完全な孤獨（complete solitariness）の中に存在するのと、なんら違わないであろう。恐らくかゝる孤獨な生は、到底考えられないものである

ことが氣附かれるであろう。また生の社會的性格（social nature）が生の價値を構成している以上、孤獨な生を望ましいものと考える理由はないと思う。この世界の内に在る惡、――それは神的なもくろみからでなく、この世界を構成する個性的存在の部分的な規制不可能性（partial uncontrolability）から生じたと、私は考えるのだが――、は、ともかくも世界が存在することの代價としては高すぎるものではない。それ故、神が弱いからとか、神に慈愛が缺けているからとか、いう古い論證は妥當でない。弱さとは、他者、に對して彼らが服從し能う（capable of yielding）ような規制を行なう能力がないこと（inability）であるが、彼らが服從し能わない（not capable of yielding）ような完全な規制を行いえないことは、本來の意味での無能力（inability）ではない。なぜなら、それに對應する能力（ability）は、論理的に不可能なことを爲す能力ということになるであろうからである。

こゝでわれわれは、われわれの本來の質問――何のためにわれわれは生きるのか、或いは、人生の目的は何であるか――に答えることが出來る。すなわちわれわれは、良く生きるため、他者のために生をより良きものとするために生きるのである。しかも、このことは、そうすることによつて、われわれすべてがその成員であるところの一つの生（one life）に對して不滅の價値を貢献するが故に、値打があるのである。一つ類比を考えてみよう。われわれ各自にとつて身體の中にある多くの細胞は、もともとわれわれのために存在するのであつて、われわれがもともとそれらの細胞のために存在するのでないということは、自明のことである。しかも、それにもかかわらず、われわれ各自の中にある多くの細胞は、彼ら自身の存在を享受しているともいえる。彼らは、それぞれ個性的組織體として生きている。彼らを人間や動物の身體組織の全く外に、取り出して生育させることが可能であるとの證明もなされている。ところで、われわれは宇宙的生（universal life）の内部にある細胞の如きものではなかろうか。他の同じような細胞の間に伍して、われわれの持つ特權は、われわれ人間は或る程度、大きな全體に對してなすわれわれ自身の貢献を理解し得ることである。他の細胞たちも貢献をしているのだが、彼らはそのことを知り得ないのである。

若干の哲學者や神學者が、通常理解されているような救濟論に對して提議した選言肢は、以上のごときものである。それは、ヒューマニズムに對しては、選言肢というよりむしろその完成である。と云うのは、それはヒューマニズムに全體的宇宙的背景、空間・時間内の巨大な全體的生、またすべてを包括する意識におけるその全體的生の統一、を承認せしめるからである。

單なるヒューマニズムは、われわれの生とこの全體との理解しうべき聯關を、見出す努力を抛棄している。しかしこの抛棄によつてヒューマニズムは、人間性の内にひそむ可能性のすべてを表現するのに失敗している。時間と永遠の背景についての瞑想（meditation）は、人間性に深く根ざしている傾向なのである。

もしわれわれの見解が妥當ならば、われわれは萬人が至福であり和合し、なんら鬪爭や不和の可能性の存しない天國とか、パラダイスの夢を斷念せねばならない。もろもろの個性的存在は、神によつても、社會科學者たちによつても、――（誰が科學者たちの異なつた立場を統御するのかという疑問を持ち出すまでもなく）――、完全に和合せしめられ得ない。ユートピアは不可能である。悲劇というものは、存在のどの局面にも常に横わつているであろう。この點について、あの英國系アメリカ人である科學哲學者、ホワイトヘッドと、ロシアの神學者ベルジャエフは一致している。

それではわれわれは、未來についての希望的想念も、完成への夢もすべて斷念するのであるか。恐らくわれわれは、この希望的想念を完成への夢から分離させるべきである。あらゆる生き物の内には、何か希望らしきもの、努力を通して獲得さるべき價値感（sense of value）がある。しかも價値というものは、完成の夢が到達されなくとも、或いは悲哀、苦しみ、危機感につきまとわれないような狀態に達することがなくても、全く純正（genuine）であり得る。動物達は、危險のさ中にあつても、災難に面しても、生を生き甲斐あるものと感じている。人間も同じことである。地上においては、良き生（good life）と完全な生（perfect life）とは全く別のものである。完全な社會を約束されな

いならば、改革のため努力するのを拒むというのであるならば、それは子供らしいむずかり(petulance)のようなものである。われわれの目標は、完成の域に達するということである必要はない。しかしわれわれ自身とわれわれの子孫のために、達し得るかぎりの良き生であるべきである。この生を改善するための何ごとかを、果さずに抛棄するのは誤りである。たとえユートピアの見込が、どんなに遠い未來のものであるにもせよ、改善を抛棄するのは誤りである。

それではわれわれは、單純に完全性の理念を却下すべきであろうか。私個人としては、それを却下したいとは思わない。しかし私は、それが相應しいと思われる場所、卽ち超人間的なもの(the superhuman)の内にそれを置く。それは、統御をなしうる唯一のもの、すなわち神的生命(the divine life)にほかならないが、それは世界を統御するというのではなく、――世界は部分的には規制不可能である――、世界に對する自分自分の應答を規制するものである。この世界をいつくしむ神の愛は、世界のもろもろの惡と限界にもかかわらず、無數の生命に分散せしめられている諸價値の中から、唯一の、すべてを包括する、――どんな意味でいうにもせよ、これは可能であるが――、きず無き綜合(a flawless synthesis)を、またすべての小さな樂音がそれに寄與するところの無限の一大交響曲(one great endless symphony)を作り出すことが出來る。こゝには實際に、最終行のない詩、無限の變奏曲をもつに相應しい主旋律がある。

人間がそのさまざまの資質にもかかわらず、一個の動物にすぎないこと、つまり物質の集成された斷片であり、廣大な宇宙の中にあるしみの塊り――そこでは良い意味で宇宙は彼のために在るとは考えられない、――に過ぎないということを、眞劍に謙遜に承認するのは人間にとつて難しいことである。宇宙が人間のためにあるのではなくて、宇宙のために、彼が宇宙的生に對して寄與し得んがために、人間は在るのである。しかも人間は、この寄與を自覺し、自分の役割と、自分の能力の行使を享受し得るが故に、自分がより大きな目的のために利用されていることに對して不

平を喇つことはできないのである。何となれば、この目的が彼に獲得するように求めているのは、彼自身の善であり、また「虫も食わず、さびもつかず、また盗人らが押入つて盗み出すこともない[1]」あの寶庫に、すなわち永遠者(the Everlasting)の祭壇に、捧げるよう求めているのも、彼自身の善であるからである。

「かくの如く、萬物の相對性の故に、この世界の神に向つての反作用がある。すべての新しく造られるものは、神が現實世界を客觀化して實現していくときの新要素である。神の本原的性質(primordial nature)は不變であるが、その派生的性質(derivative nature)は、世界の創造的前進の結果として生ずるものである[2]」。「この派生的性質に於ては、世界は直接性の同高音(ユニゾン)において感得されている[3]」。「神の知慧は、すべての現實を捕捉して、一つの完結された體系の内に在ることができるようにさせる。現實の苦難も悲哀も失敗も勝利も歡喜もその體系の内にあつて、それらが正しく感得されるとき、宇宙的神的感得との調和の中に織り込まれるのである。宇宙的感得は、常に多であると共に常に一であり、常に目新しい前進をなし、絶えず進みながら決して滅びないものなのである。破壞的な惡のもろもろの反逆は、純粋に自己配慮的(self-regarding)であるが故に、常に個別的事實のもつ瑣末さの中に解消せしめられる。しかもそれにもかかわらず、それらが達成した良いこと――個別的歡喜や悲哀、また必要とされる對照の導入において――は、それが完成された全體に對してもつ關聯によつて救われる。このような神の本性の作用的生長(operative growth)が、最もよく理解されるイメージは、――これはあくまでイメージに過ぎないが――、何ものも失われないようにとの優しい思いやりのそれである[4]」。

「結果として生ずる(consequent)神の本性は、この流動する世界が神において、客觀的不死性をもつことによつて永遠的となる、ということである[5]」。

「あらゆる宗教の基礎は、永遠の統一へと推移して行く世界の力動的な努力(dynamic effort)を物語るところにあり、また世界のなす努力の多様性を吸收することによつて、完成をもたらすという目的を實現する神の、靜的尊嚴

(static majesty) の姿を物語るところにある」[6]。

「結果として生ずる神の本性とは、現實のもつ多様な自由を、神自身の現實化の調和の中へ受容れることによつて、自らの經驗を完成することである」[7]。

「このようにして、あのどこまでも固執的な切望、――存在することの興味は、滅んでいくものでありながらしかも永久に生きているところの、われわれの直接的な諸行爲の不斷に現在的で衰微するところのない重要さによつて、活氣づけらるべきだという、どこまでも固執的な切望――が正當づけられるのである」[8]。

以上のような他の哲學書には見られぬ、偉大な言葉の中に、私はキリスト教と佛教の何れにも通ずる積極的なメッセージを見るのである。最上の佛教の教義は、最上のキリスト教の教義と一致すると私は信ずるが、それは、究極的な意味 (ultimate meaning) が、今・こゝで日常生活の具體的特殊性の内に體現 (embody) されているということである。

私はホワイトヘッドの理論が、どうしてこのことが可能であるかということを論じた最も明晰なものであると思う。われわれは、あらゆる行爲において、その時々多少の程度の差はあれ、豊かにまた適切にすべてを包括する神的自己創造 (all-embracing divine self-creation) に參與している。この神的自己創造はあらゆる個々の限界と完全性とを超越しており、そこからは何ものも取去られることなく、しかも常に何ものかがそれに對して附加えられ得るのである。一羽の雀も、貢献を果さずに落ちることはない。しかもそこには常に、さらに獨自な個性と斬新な種が生ずる餘地がある。以上のような思いに耽りつつ、これらすべてのことをはつきり覺ることによつて、われわれは、共同の生 (common life) ――神という聖なる太洋へそゝいでいる河の流れ――に對して最大限の貢献をなすという意味深き課題の中に、われわれ自身の十分な報酬を見出すことができるであろう。

(了)

(1) マタイ傳六章十九節
(2) A. N. Whitehead ; Adventure of Ideas. New York 1933. p. 356-7.
(3) A. N. Whitehead ; Process and Reality. Cambridge 1929. p. 489.
(4) ibid, p. 489-490.
(5) ibid, p. 491.
(6) ibid, p. 494.
(7) ibid, p 494.
(8) ibid, p. 497.

(筆者　米國エモリ大學〔哲學〕教授
譯者　京都大學文學部〔基督教學〕臨時教務員)

前號目次

構想力の問題……石田仁
フッサールの「エイドス」……青木隆嘉
精神現象學の成立史……米倉守
——ヘーゲル精神現象學の研究、一——
新着外國雜誌所載論文一覽

告豫　論文號次

知識學の本質とその內的動性……辻村公一
現代學生と宗教……監修（矢田部達郎　有賀鐵太郎）
——實態調査に基づく考察——
中島誠　津島忠
デカルトの靑春……竹田篤司

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.

The Aim of Life

by Charles Hartshorne

What is the aim of life, the "good" we seek? To this question the humanistic view gives an answer though insufficiently, that it is to enjoy this life and this world. The popular religious view, which does not contradict humanism, gives also an answer that it is to prepare ourselves for a better life, an everlasting happiness after death, by making this life a means to that life.

But is an everlasting continuation of the individual life, even in paradise, desirable? The zest of living requires novelty. And the solution of the problem of novelty is death.

Neverthless, I believe there is a real problem which the popular religious views are trying to solve; what is the total value of life in the univers as a whole and through all the future? And why does it matter what happens for a little while on this small planet in the vastness of space-time?

For three thousand years or more, men have had glimpses of an answer to these questions: if there is a unity of life in space and time, if all lives are items within an all-embracing, conscious life, then indeed our every moment can contribute its mite to a single value. In accepting this view we must overcome the following great difficulty; how can we believe that all life is included within a supreme and everlasting life, when there is so much conflict, suffering, and wickedness in the world? If the supreme life enfolds all, how is evil possible? Is it unable to control its own constituents?

According to my opinion, for the divine life to exercise precise control over its constituents would be the same as for it to have no constituents. And the evil in the world, which results–I hold–not from divine contrivance, but from the partial uncontrolability of the individuals making up the world, is not too high a price to pay for there being a world at all.

We may now answer our original question, what is the aim of life? We live to live well and to make life better for others, but this is worth doing, because we thereby contribute indestructible value to the one life of which we all are members.

(summarized by Toshio Mikoda)

The Problem of Reason and Faith in the Theology of Augustine

by Haruo Kaneko

The discussion about the relationships between reason and faith in the theology of Augustine is connected with the problem of dualism of knowledge and faith which was one of the leading motives in Christian antiquity. Conquering this dualism, Augustine formulates a characteristic thought based on the blending of the mysticism of Neo-Platonism and Catholic authoritarianism.

When we consider the problem of reason and faith in the field of his thought, we should, at first, take the following three viewpoint into our consideration; (1) a viewpoint which separates reason and faith from their objects and discuss their relationships in terms of the functions of the cognitive subject, (2) a viewpoint by which one fails to see the ultimate oneness of reason and faith of each object, and thus considers them separately, (3) a viewpoint by which one discusses which of them has the temporal priority basing on the conclusion of (2), and by this point of view forgets to consider the ontological thinking of reason which lies at the bottom of such priority.

But the problem of priority should not only be treated in the dimension of time but in the deeper dimension of time, eternity which transcends it.